

年間第二十二主日

2010.8.29

ルカ 14 : 1、7～14

今読まれた福音では、神様が求める態度はどのようなものか、婚宴に招かれた際にどの席に座るかというたとえを用いて語られています。婚宴の席というと、女性ならどのような服装で行ったらいいのか気になるころだと思いますが、あまりそういうセンスのない私は、ちょっと別の角度から、違う例から今日の福音について考えてみました。

違う例とは、以前に勤めていた会社での、営業会議の円卓の席順です。月はじめの営業会議の席は、前の月の業績で決まりました。業績が良かった人が時計回りの1時のあたりの上席、悪かった人が11時のあたりの末席に座ることになっていました。会社に入りたての頃は、末席の辺をうろうろしていました。何とかして、上席に座れないものかと思いつけていましたが、3年目の後半から上席に座ることが多くなってきました。座る席が上がってくると、営業会議の風景が違って感じられました。今日の福音にある招待された客が上席を好んだというのは、その時の私の気持ちと重なるのかもしれませんが、人間そのものは変わっていないのに、偉くなったと錯覚するのです。

しかし、席のことでいい気分になれたのは短い期間だけです。勤務年数が増えるにつれて、「いつまでこの業績を維持できるだろう？」「定年まで勤め上げることができるだろうか？」「やめたとしたら、将来どうしたらいいのだろう？」という不安がいつもつきまといました。また、“業績を上げなければ自分には価値がない”というこの世の判断基準を自分に当てはめ、苦しんでいました。上席であっても、ここは自分の居場所ではないと感じながら座っていました。

結局、わたしは、会社を辞めて、司祭を志すことになり、来月に司祭に叙階されることになりました。かつての不安からは解放されました。けれども、今度は別の疑問が生まれます。今日の福音にある、上席と末席に座っているのは、「昔の自分なのか？ 今の自分なのか？ どちらの自分なのだろうか？」という問いです。普通に考えれば、神様にお仕えする司祭の方が、遠慮して末席に座っていると神様が、「どうぞ上席に座りなさい」と招いてくれる筋書きになるのでしょう。けれども、「そうではない」と感じるのです。その理由は、差し迫ってくる貧しさのリアリティが違うからです。仕事をしていた時の自分の方が、霊的に貧しく、日々突きつけられて生きていました。神様が最も救いの手を差し伸べたい部類に自分がいたと思えるのです。けれども、司祭になると、突きつけられて生きるかどうかは個人の生き方、自由に委ねられ、上席に案内されることが普通のような感覚になり、あの頃の自分の貧しさを忘れてしまう怖さがあるのです。司祭となっ

て具体的に、人を助けようとする中で、別の貧しさ・弱さのリアリティが現われてくるのかもしれませんが、勉強ばかりしていると、貧しさに疎くなっている自分を感じてしまいます。

何度か黙想しましたが、出てきた答えはこうでした。神様に高められるのは、どこにいても自分の貧しさと向かい合える人だということです。婚縁の席も、会議の席も仮のもの、人間が便宜的に考えたもので、神様の意図に反することもあります。だから、それにあまり一喜一憂しないことです。自分が神様のみ前で、貧しい自分のありのままにいられることが第一です。会社員であっても司祭であっても、自分の貧しさを認め、イエスに信頼しているかどうかが一番に問われることなのでしょう。だから、身分で固定されるものではなく、それは日々問われているのでしょうか。どの席か？ではなく、今日、見えないところで主に信頼して生きているかが問われています。主に信頼している人は、たとえこの世的には貧しくとも、神様は最愛の者として高く上げてくださいます。

高円寺教会の共同体には、自分の貧しさを知って、イエスにより頼む生き方を実践している人が数多くいます。また、営業マン時代の私のように、仕事などの不安に押しつぶされている人もいると思います。共同体が、互いの体験を分かち、祈りで支えて、神様に高く引き上げてもらえるように助け合いましょう。そのための恵みをこのミサの中で願いましょう。

イエズス会助祭 柴田 潔